

A 語句の意味と読み

(1) よくない・見苦しい・みっともない / 「まさ(正) + なし」で、正しくない・よろしくない、が元の意味。ここは逃げる相手の振る舞いをとがめている場面なので「みっともない」

(2) お歯黒。歯を黒く染めること(都の貴族や上流の若者の身だしなみ) / 「かね(鉄漿)」は歯を染める液。荒々しい東国武者の姿ではない

(3) 読み=よわい/意味=年齢・年ごろ / 漢字では「齢」。「わが子の小次郎がよはひほど」=わが子と同じくらいの年

(4) 終止形=まします/意味=いらっしゃる(「あり・をり」の尊敬語) / 「いかなる人にてましまし候ふぞ」=どのようなお方でいらっしゃいますか

(5) 気の毒だ・かわいそうだ・いたわしい / 現代語の「いとおしい(かわいくてたまらない)」と訳すと×

(6) 情けない・つらい・残念だ / 現代語の「くやしい」より広く、「ふがない・情けない」の気持ち

B 文法

(7) もとの形=まさなく(形容詞「まさなし」の連用形) / 変化の名=ウ音便 / 「まさなく」の「く」が「う」に変わった形。本文の終わりの「なさけなうも」も同じウ音便

(8) 四段活用/尊敬語(「お~になる」の意の尊敬の補助動詞) / 下二段の「給ふ」は謙讓で、会話文の中で「思ひ給へ」のように使われる。ここは地の文で「問ふ」についているので四段活用の尊敬

(9) 意味=自己の願望(~たい) / 直前は未然形(「たてまつら」) / 未然形+ばや=願望。已然形+ば(~ので)と混同しない

(10) 文末の打消推量の助動詞「じ」と呼応する / 「よも~じ」で「まさか~ないだろう」 / 「よも」は下に打消推量が来る

(11) 助動詞「む」の已然形(係助詞「こそ」の結び) / 意味は意志(きつと~しよう) / 「こそ」があるので終止形「む」

ではなく已然形「め」になる

(12) 連体形/係助詞「ぞ」を受けた結びだから(係り結び) / 「ける」は過去の助動詞「けり」。「首をぞかいてんげる」も同じしくみ

C 主語・指す内容・敬意の方向

(13) 謙讓語/熊谷から敦盛(大將軍)への敬意 / 会話文なので敬意の主は話し手の熊谷。「候へ」は熊谷から聞き手の敦盛への丁寧語

(14) 尊敬語/熊谷から敦盛への敬意 / 「させ給ふ」は二重敬語(最高敬語)とする説明と、敬意を強めた尊敬とする説明がある。お使いの教科書の説明に合わせる

(15) 敦盛/尊敬の補助動詞「給ふ」が使われているから(熊谷は自分の動作に尊敬語を使わない) / 「汝(=おまえ)」と呼びかけられた側が、次の行で「熊谷次郎直実」と名のっていることも手がかり

(16) 作者(語り手)から敦盛への敬意。①③は会話文なので話し手である熊谷からの敬意だが、⑬は地の文なので作者からの敬意になる。 / 話し手が誰かで敬意の主が変わる。地の文なら作者。ここで「ただとくとく首をとれ」とおっしゃったのは敦盛

(17) 討たれる敦盛のための、死後の供養(冥福を祈る仏事)のこと / 「孝養」はここでは親孝行ではなく、死者の供養の意味

D 口語訳

(18) 顔だちが本当に美しかったので / 「容顔」=顔だち。已然形+「ば」は順接の確定条件(~ので)

(19) お前は誰か。 / 「たそ」は「誰(た)そ」。「た」が「誰」の意味で、「そ」は係助詞「ぞ」の古い形(清音)。疑問語「た」があるので「誰か」という問いかけになる

(20) お助け申し上げたい。 / 「たてまつら」は謙讓の補助動詞。「助けてさしあげたい」でもよい

(21) (あなたは)まさかお逃げになることはできませんまい。 / 「よも~じ」で「まさか~ないだろう」。「させ給ふ」は尊敬語なので、逃げられないのは敦盛のほう

E 内容・記述

(22) 荒々しい東国武者ではなく、薄化粧やお歯黒をする都育ちの、身分の高い若武者。(三十七字) / 「大將軍」と呼びかけられるにふさわしい、平家の公達の姿

(23) 組み伏せた相手が「年十六七ばかり」で「薄化粧して、かね黒なり」、しかも「わが子の小次郎がよはひほど」の美しい若者だったので、わが子を重ねてしまい、討つのがしのびなかったから。 / 採点のポイント＝「年十六七」と「わが子の小次郎がよはひほど」(わが子と同じ年ごろ)の二点が書けていれば○

(24) うしろには土肥・梶原ら味方が五十騎ほど迫っており、助けようとしても敦盛はどうも逃げきれない。どうせ他人の手にかかるのなら、自分の手で討ち、その後の供養をしてやりたいと考えたから。 / 「味方の軍兵雲霞のごとく候ふ」「よものがれさせ給はじ」が理由にあたる

(25) 武芸の家に生まれた武士であるために、わが子ほどの年で、助けたいとまで思った若武者を、自分の手で討たねばならなかったから。 / 直後の「武芸の家に生まれずは、なにとてかかるうき目をばみるべき」が根拠。物語では、この思いがのちの直実の出家(発心)へつながっていく

F 文学史・思想

(26) 軍記物語 / 『保元物語』『平治物語』『太平記』も同じ仲間

(27) 無常 / すべては移り変わり、栄えるものも必ず衰えるという見方

(28) 琵琶法師 / 語りものとしての平家物語を「平曲」という

【現代語訳(全文)】

熊谷は、「ああ、大將軍とお見受け申し上げます。みっともなくも敵に背中をお見せになるものですね。お引き返しなさい。」と、扇をあげて招いたので、(若武者は)招かれて引き返してくる。

渚へ駆け上がろうとするところに、(熊谷は)馬を並べてむんずと組んでどうと落ち、取り押さえて首を切ろうと、かぶとの内側を押し上げて顔を見たところ、年は十六、七ほどの若者で、薄化粧をして、お歯黒をつけている。わが子の小次郎ほどの年ごろで、顔だちが本当に美しかったので、どこに刀を刺してよいとも思われない。

「そもそもどのようなお方でいらっしゃいますか。お名のりください、お助け申し上げます。」と申し上げると、「お前は誰か。」とお尋ねになる。「たいした者ではございませんが、武蔵の国の住人、熊谷次郎直実(と申します)。と名のり申し上げます。

熊谷は、「ああ、お助け申し上げたい。」と思って、うしろをさっと見たところ、土肥・梶原が五十騎ほどで続いている。熊谷は涙をおさえて申し上げたことには、「お助け申し上げようとは存じますが、味方の軍勢が雲や霞のように数多くございます。(あなたは)まさかお逃げになることはできますまい。他人の手におかけ申し上げるよりは、同じことならこの直実の手におかけ申し上げて、その後のご供養をきつといたしましょう。」と申し上げたところ、(若武者は)「ただ早く早く首を取れ。」とおっしゃった。

熊谷はあまりに気の毒で、どこに刀を刺してよいとも思われず、目の前も暗くなり心も消え果てて、前後もわからなくなったけれども、そうしてばかりもいられないことなので、泣く泣く首を切ってしまった。

「ああ、弓矢を取る武士の身ほど、情けないものはない。武芸の家に生まれなかったならば、どうしてこのようなつらい目にあうだろうか、いや、あうまい。情けなくもお討ち申し上げたものだなあ。」と繰り返し嘆いて、袖を顔に押しあててさめざめと泣いていた。